

対話的な学びを通して、

友だちとのコミュニケーションを問い直す指導方法とは

教育学研究科 教育実践創成専攻 教育実践開発コース 教師力育成分野 秋山悦子

1. 問題と目的

本研究は、中学2年生を対象にした「特別の教科 道徳」の授業を実践し、その分析を行ったものである。

平成29年に告示された中学校学習指導要領において「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」(文部科学省,2017a)が示された。対話的な学びを支える土台の1つに生徒同士の人間関係が考えられる。文部科学省(2017b)は「学習や生活の基盤として、教師と生徒との信頼関係及び生徒相互のよりよい人間関係を育てるため、日頃から学級経営の充実を図ること」と関連を記している。さらに、田村(2018)は、「深い学び」には「自らの考えを主張できることにのみ目を向けるのではなく、聞き手としての子供の傾聴の姿勢も重要である」とし、生徒同士のコミュニケーションの重要性について言及している。

しかしながら、文部科学省(2017c)は「心から信頼できる友達を求め、友達への期待も強まる時期に、友達との関係に、時には悩み、友達であるからこそ意見がぶつかることもある」と述べている。中学生の発達段階において、他者との関わりの中で、自分の気持ちが伝わらずに、悩みや葛藤が起きやすいことがわかる。そのため、学校で安心して学習に向かうには、まず生徒同士が互いの違いに気づき、互いを理解する具体的な指導方法を検討する必要性を感じた。その際、教師側の視点だけでなく、生徒一人ひとりが、実際は友達についてどのように捉えているのかを把握することが大切だと考えた。

本研究では以上をふまえ、中学生が考えている友達とのコミュニケーションの在り方と現実とのギャップについて気づかせ、友だちとのコミュニケーションを問い直す指導方法を検

討することを目的としている。今年度(2020年度)は、新型コロナウイルス感染症による影響を受け、学校の生活様式も大きく変化した。互いに物理的な距離を置きながら生活することを心がけており、授業においても感染症を予防しつつ意見交換をするためにはどのような方法があるのか、試行錯誤を繰り返す日々であった。休み時間に話すことさえも躊躇する時期があり、友達と話すことや友達の話をお聴くといったこれまで当たり前に行ってきたコミュニケーションがいかに大切であったか明確になった。

2. 研究方法

- (1) 対象校 山梨県内公立A中学校
- (2) 期間 2020年6月～9月
- (3) 生徒 2年生 3クラス
- (4) 実施方法

今年度は、「道徳科が学級経営と深く関わっていること」(文部科学省,2017d)を踏まえて「特別の教科 道徳」の時間に授業を行った。6月から7月にかけて1回目の授業実践を、そして9月に2回目の授業実践を2年生の全3クラスで行った。

①なぜ「特別の教科 道徳」の実践なのか

道徳科で授業実践をした理由は2つあり、1つ目の理由は、他者との関係性に対し、生徒一人ひとりの意見が尊重されることにある。また2つ目の理由は、生徒が教材から友達とのコミュニケーションを問い直す気づきが得られると考えたからである。

友達は大切だと分かっているけれども、実際は友達に対する考え方も関わり方も人それぞれであり、悩むことがある。人は、実際に経験をしない

と当事者意識を持って考えることは難しいこともある。しかしながら、道徳科の授業では、理想と現実の間で揺れ動く気持ちを共有した上で、教材を通して生徒は友達について考えることができる。そこで、中学生の友人関係に焦点をあてて、生徒同士が互いの違いに気づき、互いを理解していくための具体的な指導方法を道徳科の授業で検討することにした。そのため、2回の授業実践では「相互理解、寛容」及び「友情、信頼」を内容項目とする教材を選んだ。

第1回授業実践(6月～7月)

<p>教材名 : 「まるごと好きです」 (出典「中学道徳2 とびだそう未来へ」教育出版) 内容項目 : B 相互理解, 寛容 ねらい : 「まるごと好きになる」手法について考えるを通して、人との上手なつき合い方を身につけようとする実践的態度を育てる。</p>
--

第2回授業実践(9月)

<p>教材名 : 「違うんだよ、健司」 (出典「中学校道徳 読み物資料集」文部科学省) 内容項目 : B 友情, 信頼 ねらい : 友情について、他者と意見交流することで多様な考えに触れ、互いの考え方の違いを認め合いながら、これまでの経験を振り返り、自分自身の考えを広げることや深めることを目指す。</p>
--

②なぜ対話なのか

佐藤(2015)の「学びの対話的実践の三位一体論」を参考にして、「対象世界との出会いと対話」を「教材との対話」、「他者との出会いと対話」を「他者との対話」、「自己との出会いと対話」を「自己との対話」として授業を構成した。他者との関係性に対し、一人ひとりの意見が尊重される道徳科の授業では、自己との対話を通して自身の考えを整理し、深める時間が重要だと考える。

上記に示した対話によって、道徳科で提示さ

れる課題解決に向かって、様々な方法が見いだせる。そして1人だけでは気づけない新しい発見が、他者との対話から生まれることも期待できる。さらに、これまでの自身の考えを見直すことや深化させることも可能だ。互いに考えていることを話し、聴き合うことによって、初めて他者がどのように考えているのかを知ることがある。話す側は意見を述べる際に、根拠となる理由を加えることでより説得力のある意見となり得る。そして授業が終わった後も、授業で取り上げた課題を心に留め、「なぜだろう」「どうしてだろう」と思考を深めていく効果が対話にはあると考えた。

③授業の流れ

教材から学んだことを自己との対話を通して考えを整理し、まとめる。その後、他者との対話によって、多様な考え方や価値観を知る。そしてもう一度、自己との対話の時間を設け、自己の考えを深めていく形に授業を構成した。授業の流れは図1に示した。

しかしながら、授業内の意見交換や発言だけでは他者の考え方を知る機会が多いとは言えない。そこで、より多くの意見を知ってほしいと考え、第2回授業実践では、授業後に短時間ではあるが、振り返りの時間を設けた。振り返りは、全3クラスの授業で生徒がワークシートに記述した意見を集約し、無記名で授業の感想等を書く形式にした。あえて無記名とした理由は、生徒の率直な意見を知りたいと考えたからである。この振り返りから生徒たちは、他者の意見を知ることになった。それぞれの考え方の違いに気づき、自己の考えを再考するきっかけとなったことが生徒の記述から見えてきた。

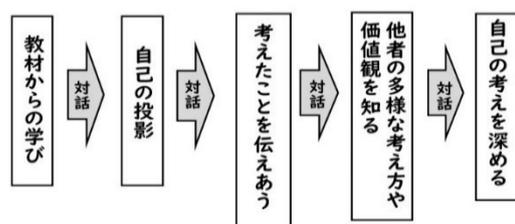


図1 授業の流れ

④発問の重要性

友達とのコミュニケーションを問い直す時は、どのような時だろうか。楽しい時間を共有する時、協力を依頼する時、仲違いした時、困った時など様々である。何を問うのかによっては、1時間の授業が大きく左右されるほど発問は重要である。生徒が「もし、自分だったらどのように考えるのか」「もし、自分だったらどのように行動するのか」と自問自答を繰り返しながら考える発問でなければならない。

第1回授業実践では、人と上手につき合う方法について生徒に問いかけた。教室の中には様々な感情が渦巻き、時として意見の不一致や意見の対立が起きる。学校という公共の場でのコミュニケーションは、互いに過ごしやすい環境を作ろうとする意識が必要だと考える。そのため、生徒自身が大切だと考えている日常生活における、人との上手なつき合い方を共有することを目的とした。

第2回授業実践では、友達と楽しい時間を過ごすことは、学校生活を充実させることにつながり重要である。しかしながら、学習や人間関係など、困ったことや悩みも多かれ少なかれ発生する。必要な時に、相談に乗ってくれる友達や助けてくれる友達とは、どのような相手だろうか。慌ただしい毎日の中で、一度振り返り、自分自身を見直すことも必要な時間ではないかと考えた。また友達だから言えること、友達であっても言えないことなど、信頼する友達であっても人それぞれの考えや表現の仕方は異なる。実際に生徒は、友達についてどのように捉えているのか、一人ひとりの意見を聞きたいと考えた。

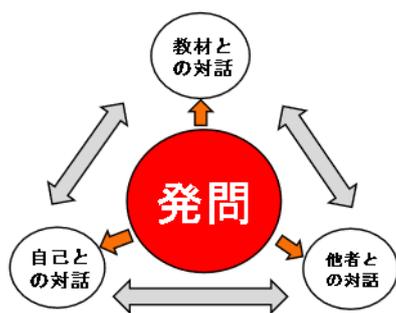


図2 発問の重要性

⑤ワークシートの工夫

発問による対話的な学びの効果をあげるために、ワークシートも工夫した。対話的な学びを実践するために、第1回授業実践では、田村・黒上(2013)を参考に「イメージマップ」というテーマへの気づきや考えを広げていく効果のある「思考ツール」を取り入れて授業を行った。1クラス目の授業終了後に、「思考過程は螺旋状に巡り伸びていく」という言葉を指導員からいただいた。その言葉から思い浮かんだワークシートが図4に示した「H・Aスパイラル」である。スパイラルとは螺旋を意味する。

このワークシートは下から順に記入していく形を取っており、上から順に書いていくという従来の形を取っていない。図3に示したように、授業の中で自己と向き合い、「なぜだろう」「どうしてだろう」と思考を巡らす過程を図示している。あえて視線に抗うことにしたのは次のような理由がある。

- ・思考が上に伸びていく様子を図示したいという授業者の願いがあった。
- ・見直す時や掲示物とする場合に、結論から見ることができる。

第1回授業実践では、授業者の説明が足りず、多くの生徒がワークシートの上から記入を始めた。その反省点から、ワークシートの一番下の部分に名前の記入欄を設けた。書き始めに工夫を取り入れたことによって、使いやすい形となった。第2回授業実践で使用した「H・Aスパイラル」は後述する図6に示した。

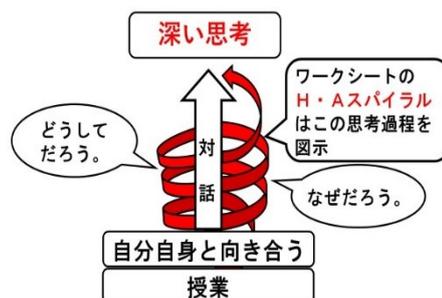


図3 ワークシートの工夫

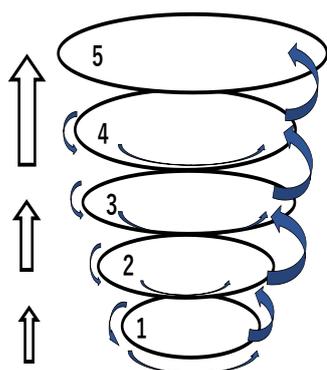


図4 H・Aスパイラル

ワークシートを使用することにより、1時間の授業内で、生徒がどのように思考を巡らせていたのかがわかる。また意見に加えて、根拠となる理由を文章で表すことも可能である。

本研究において開発し改良を重ねたワークシートのことを「H・Aスパイラル」と呼んでいるが、それは指導教員の長谷川千秋先生と授業者の頭文字をとって名付けたものである。

3. 生徒の意見の分析

①第1回授業実践

第1回授業実践では、転校生である主人公が、新しい中学校で出会う友達の良いところも嫌なところも、まるごと好きになるつき合い方を紹介している教材を用いた。そこで、生徒が学校という公共の場での友達とのコミュニケーションにおいて、心がけていることを尋ねた。そして、他者との対話において意見を共有することを目的とし、次の発問をした。

あなたが日ごろ、人と上手につき合い方をするために心がけていることをみんなで話し合ってみましょう

まず初めに、自己との対話によって、生徒が自身で心がけていることを振り返った。その後、前後左右の人または3~4人のグループで意見交換をし、思い出せなかったことや新たな意見を取り入れていた。

問いに対して複数の生徒が、他者との対話で

共感した方法を含め、類する記述をしていた。その記述の一部を表1に示した。

「人の話をよくきく」という意見は3クラスの授業で共通して出された意見の1つであった。この「人の話をよくきく」や「相手の話にも耳を傾ける」という意見は、傾聴の姿勢である。参与観察において、生徒たちは、教師や仲間のお話をよく聞いていた。そのため、「人の話をよくきく」ことの大切さを理解していると考えられる。また「自分の意見をしっかり持つて」という言葉から、相手の考えや気持ちに同調するだけでなく、自分自身はどう考えるのかという視点を大切にす双方のコミュニケーションについても記述が見られた。

そして、相手のことを考え、思いやる意見が多いことに気がつく。特に、学校生活で長い時間を過ごしている教室という空間の中で、人と上手につき合うためには、互いに思いやる関係が大切だと考えていることがわかる。他者との対話によって、共通認識を広げることにより、互いに過ごしやすい環境を意識することの一助になると考える。

表1 人と上手につき合う方法

生徒が考えている主な方法
人の話をよくきく
自分の意見をしっかりもって、相手の話にも耳を傾ける
悪口を言わない
相手の気持ちを考える
相手のことを知る
相手を傷つけること、嫌がることをしない
お互いに思いやりをもつ
相手を理解しようとする
他の人の考えを尊重する
一緒にいて楽しい
感謝
相手の変化に気づく

生徒たちは、これまでの学校生活の中で経験したことや考えたことなどを書き出している

のだろうが、1時間の授業の中で様々な意見が出された。伊藤・杉山(2016)は「子供達はつねに既に「答え」がわかっている」と述べている。しかし、時に意見の不一致によって、思いが伝わらないことがある。また、コミュニケーションの不足によって、相手の状況や考えが分からないこともある。互いによりよい関係を築くには、「相手のことを知る」ことが必要であると考えられる。

②第2回授業実践

第2回授業実践では図6に示したワークシートへの記述が、大人を唸らせるほどよく考えられているものであった。ワークシート1,2の問いは、教材との対話から考えたことを問う質問である。生徒から出された回答は様々であった。以下に示すのはワークシート3の問いである。生徒の回答結果は図5に示した。

あなたに悩みがあり、友だちから心配の声をかけられた時、聞かれたら話しますか、聞かないでほしいと思いますか

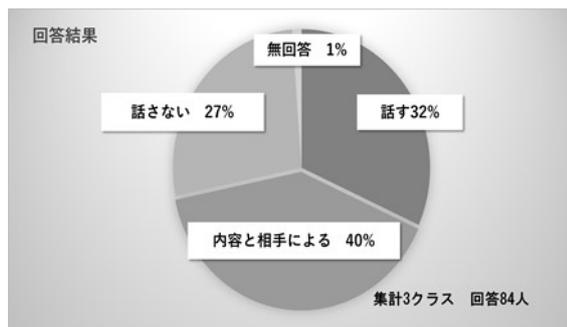


図5 回答結果 (回答総数 84名)

「話す」と答えた32%の生徒たちの記述としては「アドバイスが欲しい」「話して気持ちを軽くしたい」といった回答があった。

また、「話さない」と答えた27%の生徒たちの記述には、「心配をかけたくない」「迷惑がかかるから」という回答が多くあった。

そして、この回答結果の中で特に「内容と相手による」と答えた40%の生徒の意見に注目した。「内容」とは、悩みの内容によって話せないこともある。そして、「相手による」という

回答から、自分自身の在り方を考えさせられる。もう一度、自分自身がどのように友達とのコミュニケーションを取っているのか、自分自身と向き合い、今後はどのように考えて行動することが良いのかを問い直すきっかけになる。

では、どのような関わり方をすると友達の仲が深まるのだろうか。

その問いがワークシート4である。

僕たち3人やおばあさんたち3人のような関係はどうしたら築けるのでしょうか

この問いの中に出てくる「おばあさんたち」というのは、登場人物である健司の祖母を含めた3人のおばあさんである。おばあさんたち3人の何でも言い合える関係性を見ていた耕平が、僕や健司に悩みを打ち明けたシーンである。

生徒達は、友達との関わり合いを深めるためには、「時間の共有」や「経験の共有」をしつつ、「たくさん話をする」「相手を知る」「隠さず打ち明ける」「思いやる」「本音で話す」「素直に言う」「信頼」が必要だと答えていた。これらの意見は一見すると別々に思えるが、互いに関連していることがわかる。

そして、ワークシート5の問いを以下に示す。

私にとって、友だちとは

(複数回答)

この問いに対して、全体の約40%の生徒がキーワードとして、「何でも言い合える人」「相談ができる人」と答えた。次に続く意見には「お互いに信頼できる人」「一緒にいて楽しい人」が出された。

ワークシート3の回答結果が示している通り、実際は悩みがあった時に友達に話せることもあれば、相手に心配や迷惑をかけることを懸念して、あえて話さないといったことがある。表現のしかたは、人それぞれである。授業を通して、教材との対話から学び、登場人物に共感する気持ちもあると考えられる。

しかしながら、自分自身を重ね合わせた時に、現実との違いに気づく時がある。ワークシート5の「何でも言い合える人」「相談ができる

人」という回答は、一方で生徒たちが現実とのギャップに気づいたということであろう。

長期的な視点で見れば、友達との関係は年齢や環境等によって変化することもある。そのため、今回実践した授業内で出された意見と今後の意見については、変化があることを念頭に置く必要がある。

もし、友達に困ったことや悩みを話せない場合は、できるだけ時間のズレがないようにして教職員に相談する方法もある。

第2回授業実践で使用したワークシート全体を振り返ると、多くの生徒が「友達の定義は人それぞれ違う」ということを記していた。

違いに気づくことは、他者を理解する上で重要な視点である。この「人それぞれ違う」という認識を生徒が理解しているということは、本研究において大きい。なぜならば、違いがあるからこそ、対話的な学びを通して、継続的に友達とのコミュニケーションを問い直し、互いを理解する時間が必要だと考えるからである。

また、生徒たちの記述の中に「友達とは対等の関係」であること、そして「相手に合わせているばかりではなく、自分の意見を言った方がいい」という記述が多くあり、互いを尊重し合い、それぞれが自立した関係にあることが推察できる。このような尊重し合い、互いが自立している共通認識が浸透することで、相互に承認される安心感が生まれると考える。

また一方で、「相手に合わせる必要がある場合もある」という記述があった。学校生活において集団で行動する場合など、時と場合によって互いに歩み寄り、協力することの大切さを理解していることが伝わってくる。

「特別の教科 道徳」は1週間に1時間の授業である。そのため、授業内で教材を読んで考えるのだが、前述したような答えを出すためには、教材と対話すること、他者との対話によって気づくこと、そして自己との対話によって考えを深めるという対話的な学びがあることが大きいと考えた。そして、その対話的な学びを活性化させるワークシートと発問が大きく影響をすることがわかった。

図6は第2回授業実践で使用したワークシートである。

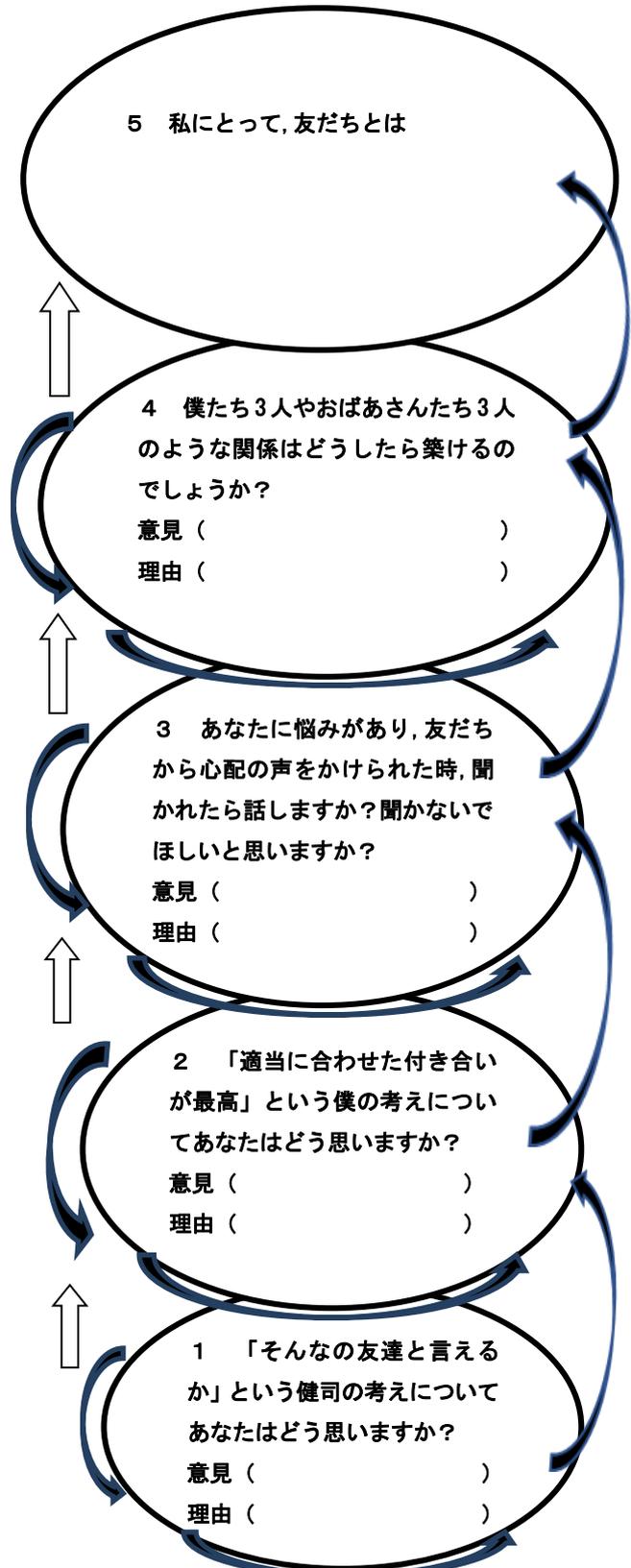


図6 H・Aスパイラル(第2回授業実践)

③第2回授業実践後の振り返りより

第2回授業実践後に、振り返りの時間を設けた。振り返りに書かれた生徒の感想を一部であるが表2に示した。

表2 生徒の感想

生徒の感想
4は理想が思いうかんでいても、なかなか実践できなかつたりしたので、少しずつでも、理想の友達関係に近づいていければいいと思った。
友達の定義はたくさんあるし、人それぞれ違って良いと思うけれど、困ったときや悩んでいるときに助け合える友達が自分や友達の心の成長につながるし、良いと思った。私もけんじくんのようなやさしさや思いやりをもって友達に接することができるようになりたい。
道徳の授業を通して友達についていろいろ考えさせられました。今の時期は友達関係などになやまされることとおおいのですごく授業をうけやすかったです。これからも友達とのつきあいかたなどでこまることもあるかもしれないけど、授業で学んだことをおもいだしてうまくつきあえていければいいです。
普段、当たり前のように「友だち」、「親友」と言うけど、 <u>実際それがどのようなものなのか、どのようなものだと自分は考えているのかを改めて確認</u> できて良かったです。
友達について思うことは1人1人ちがうけれど、友達を大切に思うのは、同じなんだな、と思った。
授業を受けて、みんなとすごい仲良く友達でいられるためにはどうすればいいのかということを考えました。やっぱり仲良くするには <u>人に合わせるだけ</u> でなくありのままの自分も出して、 <u>おたがいが受け入れることが必要</u> のかなと思いました。とてもいい勉強になりました。

(下線は筆者による)

授業や振り返りから、佐藤(2015)のいう「学びの対話的実践の三位一体論」の対話があったことにより、互いの違いに気づけたことが確認できた。そして、違いがあることの気づきは、他者理解への一歩となるのではないだ

ろうか。結果として、相手を理解することによって一方的な思い込みや誤解が少なくなると考えられる。そのため、対話的な学びを通して、互いを知ることが友達とのコミュニケーションを問い直すきっかけとなると考えた。

4. 成果と課題

①成果

「H・Aスパイラル」というワークシートを開発したことが大きな成果と言える。

2回の授業実践で、上述したような意見が生徒から出されることは過去に例がない。生徒たちの元来持っている書く力が高いこともあるが、ワークシートには自己との対話を促進する効果があると判断した。特に道徳科の授業では、自分自身と向き合う自己との対話の時間をいかに設定するかが重要である。課題に向かい、自身の考えを書き表していく過程において、ワークシートが重要な役割を担った。

第2回授業実践で、ワークシート3から5の発問は、教材を読み友達に対する生徒自身の考えを問うものとなっていた。そのため、学級全体への生徒個人の発言は、配慮を要するものだと考える。そのことから、ワークシートを使用する意義を見つけることができる。結果として、ワークシートに向かい、自己との対話が深まることにつながったと考えられる。

②課題

文部科学省(2017a)が示した「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」を目指す上で、自己との対話を深める発問を作成することは、大きな課題である。今年度の実践において、生徒が授業での課題を自分自身のこと置き換え、自問自答しながら思考を深める発問を作ることは容易なことではなかった。

授業のねらいに沿った回答を得られたとしても、授業後に生徒の変容が見られず、言行不一致や面従腹背といった状況になることが多い。そのため、生徒が道徳科で出される問いに真摯に向き合い、対話の相乗効果によって答えを探求する発問を検討しなければならない。

5. 考察

本研究では、対話的な学びを通して、友だちとのコミュニケーションを問い直す指導方法として、「H・A スパイラル」というワークシートを用いた結果、自己との深い対話を促進することを提案したい。この指導方法は、対話的な学びを支える土台として、生徒が互いの違いに気づき、互いを理解することの一助を得られたからである。

諸富(2020)は「人と人が、深く対話するときには、その中心を占めるのは、「深くものを考える沈黙」である」と述べている。思考を深めることは容易なことではないが、ワークシートを工夫することによって、生徒が沈黙の中で自己と向き合い、螺旋状に思考を巡らせて考えを深める効果の1つとなった。

今年度は、他者との関係性に対し、生徒一人ひとりの意見が尊重される「特別の教科 道徳」で授業実践を行った。田中(2020)は「週1時間しかない道徳の授業で、自己の生き方を見つめ、よりよくなろうとする思いを広げたり深めたりすることは、非常に重要である」と道徳科での授業の意義を述べている。人との上手なつき合い方や友情について、生徒同士が、田中(2020)のいう「よりよくなろうとする思いを」互いに共有する時間が、集団で生活をする学校では必要だと考える。

6. 今後の展望

今年度は、ワークシートを用いたことによって、自己との対話が促進される指導方法を検討することができた。その効果を今後は、筆者自身の専門教科において活用する可能性を検討していきたいと考えている。そして、授業の中心を貫く発問づくりが重要である。課題として挙げられた自己との対話を深める発問の作成について、今後も丁寧な吟味・検討していかなければならない。

また、生徒同士の関わり方について言及してきたが、教師と生徒における信頼関係の構築に向けて、教職員の誰かが生徒とつながる体制を視野に入れる必要があると考える。

謝辞

連携協力校の校長先生、先生方、生徒に感謝します。そして、山梨大学教職大学院の長谷川千秋先生に心よりお礼申し上げます。

引用文献

- 伊藤美佳・杉山崇(2016)いじめの起きにくい学級風土づくりの試みー「よっちゃばれタイム」プログラムの実践ー 教育実践学研究 山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要 21,p.169
- 教育出版『中学道徳 2 とびだそう未来へ 教師用指導書 解説・展開編』 pp.46-47
- 文部科学省(2017a)中学校学習指導要領 (平成29年告示) p.23
- 文部科学省(2017b)中学校学習指導要領 (平成29年告示) p.25
- 文部科学省(2017c)中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 特別の教科 道徳編 p.40
- 文部科学省(2017d)中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 特別の教科 道徳編 p.76
- 文部科学省(2012)中学校道徳読み物資料集 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/doutoku/detail/1318785.htm (最終閲覧日 2020年11月15日)
- 諸富祥彦(2020)「自己との対話」の深まりが「他者との対話」を深め、「他者との対話」の深まりが「自己との対話」を深める「本物の道徳授業」『道徳教育』11月号 明治図書 p.13
- 佐藤学(2015)『学び合う教室・育ち合う学校～学びの共同体の改革～』小学館 p.312
- 田村学(2018)『深い学び』東洋館出版社 p.140
- 田村学・黒上晴夫(2013)『考えるってこういうことか! 「思考ツール」の授業』小学館 p.121
- 田中一弘(2020)「特別の教科 道徳」の授業構想の在り方についての一考察ー教員が感じる指導の難しさに視点をあててー 教育実践学研究 山梨大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 25,p.180